102　縄文　011221

渡辺誠著＜よみがえる縄文の女神＞

◎漆。外国で漆器のことを“Japan”と呼ぶらしい、日本を代表する伝統産業なのかな。採集した生“キウルシ”をかき混ぜ、絞り漉し、ウルシにしていきます。エゴマ油とベンガラを混ぜ赤色、煤を混ぜ黒色になる。漆を塗った木製品は4000年の間、土の中で腐らず残っていた。これらを見た現代のウルシ職人が、「我々と　ほとんど　同じ技術で　作っている」と言っていたそうだ。

◎3000～4000年前の東京都東村山市。漆を掻いたウルシの木が発見され、当時、ウルシの木が植林され、間伐材は水に強く杭として使われていたことがわかってきた。

◎福井県から出たウルシの木片が世界最古の12600年前の物らしい。

◎中国の漆器は歴史がある、質も量も大きい。正倉院の宝物漆器は中国製が多い。と、覇権争いならぬ微妙な話。

◎ヒスイ5000年前。日本のヒスイ（硬玉）は新潟県南部の糸魚川や姫川だけで産出する。5000年前の遺跡では、世界最古のヒスイ加工場跡が出土した。加工場跡からヒスイの玉、蛇紋岩の石斧、石棒や土偶が出た。

◎ヒスイのような硬い石に穴をあける、ダイヤに迫る硬度のヒスイを丸い形にして、糸を通すための細い穴をあける、相当高い技術が要求される。

◎採集された原石をヒスイのハンマーで成形し、砂岩の砥石で削り形を整えた。鳥の骨と石英粒などの研磨剤で時間をかけて細い穴をあけた。鉄がないこのころ、気の遠くなるような大変な作業が想像できる。

◎新潟でしか採れないヒスイの加工品が、北海道から九州まで流通していた。

◎オレは工芸品を造るような作業が苦手である。若い頃ひょんなことからマドロスパイプの造り方を教わった。タバコ専門店で、“四角いウッド部分”と“カーボンの吸い口”のセットが売っていた、うず高く積まれていた中からメのいいものを何本か買った。何度も木工ヤスリで削り形を整えた。仕上げは染料で染めた。人が、「欲しい」というものもできた。夢中になって造り、「モノ造りは面白い」と悟った。ただオレは、最初の手ほどきの先達がいないとだめだ、“いろは”を知らないと進まない。ほかのことでも、“いろは”を教えてくれる人がいたら夢中になったかもしれない。ただ、時間をかけ、丁寧に、きれいに、という作業は苦手である。

◎巨木。北陸、石川県、新潟県に最大直径1メートルもあるクリの木の建造物がある。石斧で伐採も大変な作業、まっぷたつに裂かれた材を使ったものもある。何なのか解明されていないが、先生は、諏訪大社の御柱祭りや、出雲大社の直径3メートルの巨木につながっていくのでは・・と。

◎男女結合。縄文土器や土偶に、「これは　性表現・・」と思われる形がたくさん出てくる。現代でも各地に男根や女陰の形が祀られ神聖な場所として崇められている。先日もNHKの「と一ちゃこ」番組で、あの火野正平が、「こんなん　写していいの・・」と戸惑っていた場面の先には、人ぐらいの大きさの男根と、なるほど女陰と見られるものが並んでいた。オレも思わず苦笑した。

◎日本人は性に対しておおらか、男も女もあっけらかんと人生を楽しむように性の問題も並行して進んでいる。近世になって、「男女　席を　同じゅうせず・・」なんて思想が流行り、「みだりに　男女は　仲良く　なってはいけない」なんて言ってはいたが、縄文時代から続くこのおおらかさがまたぞろ目を吹きだし、苦笑やらクスリ笑いやら、みなさんおおらかに人生を楽しんでいる。

◎またまた山の話で恐縮だけれど、山の神様は“醜女の神様”だという。女を連れて山に入るな、若者は裸になって性器を山に向けろ、山に入る前には女断ちをしないといけない、なんて風習があったらしい。

◎今や“女人結界”なんて言ったら猛反撃を受ける。そんな風潮の中で、日本で唯一“女人結界”の場所が奈良県の“大嶺奥駆道”にある“山上が岳”付近だ。何人かの傑女がひそかに突破したらしいが、結界門があり、堂々と、「女人禁止」と書かれている。これも苦笑のひとつ。

103　縄文　051221

渡辺誠著＜よみがえる縄文の女神＞

◎ネット情報：日本人はどこから来たのか、いろいろな説があったが、DNA が現れて科学的に証明されてきた。ホモサピエンスが 10 万年前にアフリカで誕生し全世界に散らばった。日本には 3.8 万年前にやってきた石器時代人が、1.7 万年前ころに縄文土器を作り始め縄文人と呼ばれている。5000 年前に中国中心部から弥生人が入植して、徐々に混血が進んだ。島国の日本は征服されることもなくそのまま今に至っている。大陸の人々は、まわりからの侵略で、時々の時代の侵略者に殺され侵略者の子を産んだ。「平和ボケは」日本気質でいいことでも悪いことでもある。何度も征服された人は、「やるか　やられるか　やられる前に　やっつけろ」かな。

◎縄文人の精神世界の中核をなす死と再生の観念。これは先生が辿り着いた結論である。

1) 貝塚への埋葬。貝塚はごみ捨て場ではなく、魂送りの場である。食料の残滓と肉親の埋葬。人も動物も再生して豊かな恵みをもたらすことを祈る場であった。

2) 土偶は、女性の出産能力、女神の霊力を宿し、潰すことを目的に作られた。生命の復活、村の甦りのためにバラバラにして葬られた。

3) 竪穴住居の入り口下に、死産児を甕に入れ埋葬した。常にそこをまたいで通る母親の胎内に再生することを願った。入り口は魂の通り道であった。

4) 人面・土偶装飾土器。女神の顔や身体を口縁部に、土器本体は女神の身体だ。わが身を焼いて、生み出された食物は、新しい生命であり、日本神話につながっていく。

◎話は日本神話に。縄文人が古事記（日本書記も）とつながっているとは、「ほんまかいな」と驚きだが、先生方からこの手の話がいくつか聞く。1000 年 5000 年以上前の言い伝え、口承が記紀のネタになったのか、おおいに首のかしげ、納得するところだ。「そう解釈すれば　筋は通らないこともないが・・」

◎多産、豊饒のシンボルとみなされた女神は、再生の祈りを込めて殺された。女神に見立てた土偶を割り、あるいは土器の中に、「火の神」を灯すことによって霊力を転化し、それらを大地に埋めた。新たな生命を育むためにこそ、女神は焼かれて死ぬのである。

◎熱帯の神話：ココヤシの花から生まれた女の子、この子はいろいろな宝物を糞として排出できた。その宝物を村人に配ったところ、村人は気味悪がってその子を殺し、遺体を切り刻んであちこちに埋めた。すると彼女の遺体からさまざまな種類のイモ類などの食物が発生した。

◎日本書記：アマテラスの指示によって天から降りてきたアマテラスの弟のツクヨミに対して、ウケモチはご飯や魚、鳥、獣などを口から吐き出してもてなした。ツクヨミは、「なんて　汚いことを　するんだ」と怒り、剣でウケモチを切り殺した。このツクヨミの乱暴な所業に対してアマテラスは激しく立腹したことで、二人は昼と夜の空に別れた。その後ウケモチの死体の頭は牛馬となり、額からは粟が、眉からは蚕が、眼から稗が、腹からは稲が、陰部からは麦、大豆、小豆が発生した。

◎神話学者：吉田敦彦：記紀神話において稲が水田に、雑穀や豆などが畑に植えられ、さらに養蚕や牛馬の飼育までともなう、発達した農業の起源について語られているが、実はもっと以前からすでに存在していた縄文文化にも、類似の女神神話があったのではないか、と・・。「顔面把手付き土器」という深鉢で蒸された食物は、縄文人にとってまさに美味、女神からの恵みと喜ばれたのでは・・。女神を表す土器を作り、その土器で食物を調理、女神の内部からの贈り物としていただいていたのでは・・。

104　ポンポン山　051221

◎山に行きたいな、行くなら比良だね、でも、しかし、と思案しつつポンポン山にした。このポンポン山は近所の低い丘のような山だけれど、家から自転車で“摂津峡下の口”やってくると、往復 8.9 時間のけっこうな山行時間になる、なかなかにハードな山である。

◎10：20 自転車を止め歩き出した。「まてよ　この時間　帰り道も摂津峡を通る　夜の摂津峡・・」夜の摂津峡に何箇所かやばいところがある、「なんとか　明るさのあるうちに　自転車まで帰りたい」と急いだ。

◎この何日間か、寝坊が続いている。6 時になったら眼が冴えて眠れない日が続いたが、最近は目覚めたら 8 時頃が多い。ぐっすり眠れるとその日一日体調がいいが、寝坊は山に行くには不都合だ。帰り道で思ったが、「冬の　日が短い季節は　山の麓で　前日から　車中泊がいい」次回の比良はそうしよう。

◎11：30 いよいよ登り始めた。この道はひとっこ一人いない道、ジジイがヒックりかえりゃ、発見のしようがないね、と苦笑するが、1 時間、エンヤコラだ。原村の墓に焼き場と思われる建物がある。いつまで使っていたのか、壁のない焼き場だ。オレが子供の頃の鳥飼村の焼き場は壁のある建物だった。

◎平地を歩く速度が遅くなった、若い男女がグイグイ追い抜いていく。オレは山に入ると強い、登りは普通に登っていく、ぜーぜーはーはーとはいうが、止まらずに目的の本山寺の参道に合流した。途中、リンゴを齧り、パンを齧った。時間的に、てっぺんまで行くと帰りが暗くなるかも。弁当はてっぺんにするか。あと 1 時間だ。

◎歩きながら考えた。古代の日本、縄文人も弥生人も古墳時代人も文字を持っていなかった、ヤマト言葉は使っていたと思う。5000 年前ぐらいから少しづつ中国大陸の方から移民が、渡来人が、日本にやって来ていたというなら、“漢字は”“中国語”“朝鮮語”が何故入ってこなかったのか不思議に思っている。渡来人がやってきた一代目の本人は自国の言葉だったけど、その子孫はヤマト言葉に染まっていった、それぐらいに多勢に無勢状態だったのかな。ただ、漢字が、一切残っていないのは不思議のふしぎだね。

◎「いてて　なんで」右足の内太ももが攣ってきた、もうすぐてっぺんのはずだが、時間的に引き返すかと思案しつつ、弁当を広げた。澤山さんが、「いてて　攣ってきた」よく言っていた。オレは、足が攣る、高山病で頭が痛い、疲れ切って食欲がない、そんなことは一切なかった。山仲間から、「ノウテンキで　いいねえ」とうらやましがられた。トミちゃんが青い顔してぐったりしていた。衣川さんがへたりこんでいた。クマさんがひっくり返って顔面血だらけで一泊入院した。オレの太ももも 2 年ぐらい前から来始めた、薬も持っているが 5 分ぐらいじっとしていると、スーッと引いていく。とはいえ帰りの自転車でまた攣ったが・・。

◎弁当は、玄米ごはんに野菜とベーコン炒め。「血圧が　高い」健康診断でそういわれた。「検診の全部の結果のあと、もう一度測って　高かったら　薬かな　下が 100　超えてる・・」毎年、「ちょっと高い・・」ですましてきたが、これを聞いて、「ちょい　塩断ち　するか」と極端に塩分を控えている。味噌汁を飲まない、醤油や塩をかけないようにしている。オレ特性の梅干しもダメかな。それと魚をたくさん喰っている。ま、いろんなことで、体力がなくなった、ふらふらする、階段の下りが恐い、なんて感じるようになった。ただ山に来ると、歩ける、下れる、休みを取らなくても大丈夫、なんていうが、過信はアカン、ひとり山はアカン・・。

◎2：10 てっぺん到着。今にも降りそうな空模様。天気予報では曇りと出ていた、降りませんように。洛西の街が見える、京都の街が見える、生駒、葛城が見える、ややあ、海が見える、大阪湾が見える、関空のビルが見える、大阪の街が見える、三川合流も見える。

◎ポンポン山から本山寺までの道に、細い尾根がいくつかある。今にもなくなりそうな尾根だけれど、両側に丸太を置いて、崩れないように養生しているので、大雨が降ってもかろうじてふんばっている。低い山なので尾根と言っても険しくない、そこに陽が差し、土色のまだら、針葉樹の緑、褐色の幹の林立、こういう場所が何回か続く、この細い道を歩くのが好きなんだ。

◎4：30　「暗くなってから　ここを通るのは　いやだな」というところを歩いている。摂津峡の中に 3 か所ほど川のそばの岩を踏みつけ上り下りの場所がある。昼間や若い頃なら、ひょいひょいの道だ。もう薄暗くなってきたとはいえライトを点けなくてもなんとか歩ける、ここを通過し、自転車に乗り、6 時に帰宅した。

105　鳥　111221

細川博昭著＜鳥を知る＞

◎鳥の祖先は恐竜である。恐竜は滅びてしまったが、恐竜で空を飛んでいたものが、今の鳥だ、こんな話を最近知った。あのでっかい恐竜の生き残りが鳥だとは最近まで知らなかった。とはいえこの学説が、「間違いないのでは・・」と言われ始めたのも最近らしい。獣脚類の恐竜が鳥へとつながっていった。

◎獣脚類：細長い体で後肢が長く素早く行動できた二足歩行の肉食恐竜。食料は多種の恐竜を襲っていたらしい。恐竜の分類はわかりづらい、ややこしい、年月が長いので、多種多様の分類がある。

◎億年前の地球、そんな時期が何億年も続き、どこにどんな奴が棲んでいたのやら、それぞれの時代と場所によって、生物も様々らしい。恐竜とはあのでかい獰猛なものとしか思っていなかったが、優しい恐竜、小さい恐竜、毛の生えたもの、等々がいる。我々ホモサピエンスの祖先のネズミのような哺乳類、魚もいた、ばい菌もいた、植物もたくさんあった。こんな生物の話はまた今度。

◎小さく軽くなって恐竜は鳥になった。身体の広い領域に羽毛を持ち、前肢が翼状になった二足歩行の恐竜が鳥を生み出した、進化して鳥になったことは確実である。進化の過程は数千万年の時間の中に新種が生まれては消えて言った末に、鳥グループが残った。あの恐竜がいきなり鳥になったわけではないのだ。

◎恐竜から受け継いだもの。V字型につながった鎖骨。気嚢。体内の卵の作り方。

◎気嚢：かつて地球に低酸素時代あり、生物は生き残るために効率的な呼吸法をそれぞれが得た。哺乳類は肺を大きくして空気を取り込む横隔膜呼吸。恐竜や鳥は肺のまわりに気嚢という袋を作り、その袋から空気を調達する仕組みを。鳥がもつ気嚢システムは、哺乳類の横隔膜システムに比べ数倍も効率がいい。コウモリは哺乳類なので低い所しか飛べない、鳥には負けるらしい。

◎鳥は一度にたくさんの卵を産めない。亀は大量の卵を産む。

◎鳥になるために変化させたもの。胸の筋肉と胸骨。尾羽。くちばし。骨の構造。足の筋肉を腱に。折りたためる翼。消化器官の追加。

◎恐竜が鳥になるにあたって。口や歯がくちばしに。尾は尾羽に。全身の骨は数を減らしてコンパクトに、骨の中身は空洞に。逆に大きくなったのは、胸骨、胸筋、眼球、脳。

◎嘴：肉食恐竜は強い噛む力、がっしりした顎の骨と咀嚼筋があった。鳥はくちばしを選択した。頭が軽くなったが表情筋もなくなり鳥は無表情である。代わりに歌やダンスで気持ちを表している。くちばしには神経や血管が通っているので、温度、質感、感触が感じられ、繊細な作業もできる。

◎目：鳥の眼球は恐竜時代よりかなり大きくなった。目とともに脳も大きくなった。

◎腱：鳥の足は太ももには筋肉がついているが、その先は細くて軽い腱に置き換えた。

◎骨：人間の場合全身の骨は体重の20%ぐらいですが、空を飛ぶ鳥は5%ぐらい。

◎鳥類、哺乳類が絶滅しなかった理由は・・。これはまだ詳しくはわかっていないということだそうです。恐竜が全滅した隕石衝突の時に、ほとんどの鳥類も哺乳類も全滅とまではいかないが、滅びていった。ほんの一握りのそれらが後々繁栄していったのではというのです。

◎万年、億年と気軽にいうが、類人猿からホモサピエンスに変わっていくまでにたった500万年・・。万年、億年という間に、それこそ様々なことがあって、先生方は東奔西走して解明しようとしているが、聞いているオレにとっては、生物のそれぞれの時間空間の話は複雑すぎる。日々、近所の河原に出向くと、100羽ぐらいの中型鳥が目につく、カラスやサギやハトたちだ。もちろん小鳥はもっといるはず、スズメやモズやヒヨドリたちだ。鳥の舞う空を見上げ、何も考えないオレは素晴らしい。

106　安威川　141221

◎冬至の十日ほど前の今が“日の入り”が一番早いのだそうだ。12 月の 1 日から 15 日ぐらいまでの 2 週間が同じぐらいの時間の日の入りが、半月ほど続く仕組みらしい。今日ぐらいから昼の時間は夏に向かうのだ。これは知らなかった、はじめて知った、12 月 25 日あたりの冬至が、日の出、日の入りのピークだと思っていた。せっかく“地学”を選択したのに学んでいなかった。反対に“日の出”のピークも遅く来るので、冬至を挟んで一か月足らずが昼の時間が同じように短いということらしい。ほぼ一か月ぐらい、同じ長さの夜だとは、知らなかった、無知だった。てっきり、冬至夏至がピークでそれを境にしているとばかり思っていた。

◎最近は河原に来る時間を夕方にしている。走りながら、「最近　汗をかかない　なんでだ　運動量が足りない」と思っていた。「河原に来て　走っているよ」といいながらも、足は宙に浮いていない、「お前のそれは　ウォーキングだ　ジョギング　じゃない」といわれる。そのぶん一時間半ぐらい時間をかけるのだが歩いているだけでは汗はかかない。若い頃は、河原からの帰りは汗ぐっしょりで寒かった。「走るのだから　スポーツの服装を　薄着で　軽快に　走らなきゃ」今まではそれで通用していたが、薄着で寒いと、身体をちぢませて歩いていると、それこそ身体に悪い。「汗を出さないと　すっきりしない　身体によくない」と思いつき、たくさん着込んで河原に来ている。こんなつまらないことまで変わってくるのかと苦笑の限りだけれど、人間の身体は加齢とともに、日々の生活習慣も若い頃のままではいけないのだと反省している。

◎先程、かんちゃんがリンゴを持ってきてくれた。息子君が園芸農家の娘さんと結婚したからと、オレンチにも果物を持ってきてくれる。そのかんちゃんが、ついでに安威川河原を同道したいという。彼は探鳥が趣味で、以前、「オレが　日々通っている　安威川は　水鳥が　たくさんいますよ」といったら見に来られ、「ここは鳥が多い　岡村さん　猛禽もいますよ　あれが　チュウヒ・・」「えええ　あれが・・」ということがあった。車で安威川土手沿いの公園まで先に行ってもらい待ち合わせた。川下に沿って歩きながら、「あれが　〇〇カモ・・」なんていいながらメモを取り、双眼鏡を覗いている。かんちゃんは、好きなことをたくさん持っている方で、その時々を忙しくしている。この 5 年あたりは、鳥を観察することで、「鬱が　吹っ飛んだ」と自慢するぐらいに歩き回り、スズメやらカモやらを数えている。

◎かんちゃんは、アナログ人間でデジタルは滅法弱い。鳥の数はメモ用紙に鉛筆で書いている。考古学はじじいになって関西大学に入学するぐらいに好き、英会話も好き、いろんなことに好奇心いっぱいの人だ。絵も好きで、水彩画や色鉛筆で、行った先の風景を 1 時間ぐらいで仕上げている。「何もかも　独学だから　だめですよ」と自身ではおっしゃるが、絵を見れば、「それだけ楽しめたら　いいのでは」とオレは思う。

◎かんちゃんと別れ、いつものように走ってストレッチの場所まで戻ってきた。15 分ほど、「ワンツースリー　えんやこらしょ」身体を動かし、ゆすり、倒し、のストレッチ、これがまた気持ちがいいのである。来るときは陽もキラキラしていたが、5 時前、もうほとんど暗くなってきている、気温も下がってきている、帰ったら 6 時だ、飯だ、風呂だ。

◎先日、ZOOM 会議をやった。アメリカ在住の仲野さんが、「スカイプだ　無料だ」20 年も前ぐらいから何度も何度も電話がかかってきた。長話はいやだなと思いつつ、懐かしさのあまり 1 時間ほどしゃべった。その時は、「音声は　聞きづらいが」と思っていたが、1.2 年前から ZOOM 会議という言葉を聞くようになった。オレのパソコンはカメラが内蔵していないので、3000 円でカメラを買った。3 度使ったが、相手の顔が見える、たくさんの人とも話せる、パソコン画面も共有できる、会わなくても打ち合わせができるのはなかなかに便利なシステムである。ZOOM 会議の話はまた後日。

107　絵 151221

◎「岡村　おまえの好きな絵描きは　だれかね・・」なんて尋ねられたら、「・・・」俄かにはお答えできないが、「むむむ　そうだね・・」といろいろな絵柄が頭に浮かぶ。まずそんな中から若い頃に好きだった絵描きの名前を挙げてみます。絵の勉強を始めたころ、日本の洋画界というのか、街の画廊に並んでいた絵は、“ピカソ”“ルオー”“梅原龍三郎”“安井宗曾太郎”などの絵、ヨーロッパの印象派からの絵が多く並んでいた。写実の絵は嫌われていた。そんな時期に大阪で、“具体美術”が現れ、バケツに入った絵の具をキャンバスの上にぶちまける、ペケや三角を羅列していく、変わった美術が出てきたとニュースで流れていた。「あれが　絵　か・・？」具体美術の絵を見てほとんど人が嘆いていた。「基本はデッサンだ　美大入試も　デッサンだ」こんな言葉に踊らされ、1.2 年デッサンを学んだ。今のオレの絵を見ても、デッサンのヘタなオレであった。

◎ウィレム・デ・クーニング　Willem de Kooning　1904～1997 年 93 歳　オランダ生まれ、二十歳前にアメリカに密航、ニューヨークでデザイン関係で生計を立てていた。

◎「女」と題された作品を多く生み出している。マリリン・モンローも描いている

◎私はいつも、若い人、美しい人を念頭において制作し始めるが、制作中、それが変化していくことに気づいた。中年の女がいつも念頭に浮かんでくる、あんな怪物を創るつもりではなかった。

◎エレガントに描かれるのが当然であった女性像を、醜く猥雑に描いた作品は、激しく大胆な筆の動きにより描き出されている。筆で描くアクションペインティングの画家。

◎本来の写実絵画、具象的に描いていく絵画から、具体的なものを徐々に抽象化していく手法。抽象化の度合いによって、「やや具象的だとか　もうほとんど抽象化されているとか」様々に表現されるが、それらを含めて、「抽象表現主義」とオレは解説する。

◎抽象表現主義は 1940 年代、第二次世界大戦後のアメリカを中心に発展した。それまではヨーロッパのパリが芸術の中心だったが、多くの芸術家がアメリカに渡った。アメリカは芸術の歴史が浅く、西洋の影響をあまり受けていなかったので、他に例を見ない独創的なスタイルが生まれていった。

◎エゴン・シーレ Egon Schiele　1890～1918 年 28 歳オーストラリア

◎ウイーン美術アカデミーで学んだ。ヒトラーも同アカデミーを受験したが不合格だった。

◎まだまだアカデミックな美術が全盛のヨーロッパで、自由な表現をする画家たちが次々現れた。

◎死や性行為などの普通は倫理的に避けて通るテーマを、強調する作品を、制作していった。

◎先輩のグスタフ・クリムトの全面的な援助に助けられた。

◎幼児性愛者で妹との近親相姦者、それに加え、逮捕歴もある。女性遍歴はつとに有名。

◎展覧会で成功をおさめ、絵画が売れるようになったが、スペイン風邪に罹り急逝。

◎グスタフ・クリムト：Gustav・Klimt　オーストラリア　エゴン・シーレより 8 歳年上。装飾画家として名声を得ていたが、画家としても有名。裸婦、妊婦、セックスなどを赤裸々に描いた作品は、甘美で妖艶なエロスと死の香りが感じられる。日本の浮世絵や琳派の影響も作品の中に現れている。彼も多くのモデル女性と関係を持ち、子どもも多数判明している。

◎二人の画家のことを色々探り出してみると、そんなことがあったのか知らなかった、とか、フーンそうなのか、とあらためて頷くことが出てくる。シーレという人は、「とにかく　上手い　才気ばしっている　オレには　お手上げだ」とうならざるを得ないというほどの天才だ。あの色、あの線、あの構図、何をとっても、絵を見てうなってしまう。それに比べ、クーニングはもちろん上手い絵描きだけれど、彼がつくりだした世界、彼の筆致、あの絵の具の飛び散りが、「オレもやってみたい　あんな絵を描きたい・・」とすぐそこに彼の絵がぶら下がっているような身近さを感じる。

108　鳥　191221

細川博昭著＜鳥を知る＞

◎飛翔する鳥へのステップ：空を飛ぶのは鳥と昆虫ぐらいかな、象の大きさの鳥が空を飛ぶとなれば、羽も筋肉もすごいだろうなと壮大な気分になる。

◎中国の長老：荘子の話。鵬という鳥、背が数千里（10キロメートル）にも及ぶ。鵬は天を覆う雲のような翼を広げ、荒れ狂う嵐に乗って、南の果ての海、すなわち天の池へと向かう。そんなでっかい鳥がひっとっ飛び、はるか彼方までスイ～ッスイと壮大な話。その鳥に比べたら象ぐらいの胴体なんて可愛いものだ。長老に、「そんなでっかい鳥が　いたのですか」なんて野暮なことは聞かないで・・。

◎恐がりのオレにとって、空に向かって、海にむかって、「いざ出発」なんて気分にはならない。「さあ　羽をつけて　崖から　むこうに飛んでみよう」「それでは　酸素ボンベを　背中に　背負って　潜ってみよう」こんなことは想像するだけでも嫌だねえ、オレは、たまに、山に登れたらそれでじゅうぶんだ。

◎アリの大きさ、イモムシの大きさ、ウサギの大きさ、小さいものでも大きいものでも、舞い上がるには、羽やプロペラ、パラシュートやトタン板が要る。トタン板、がはは、過日の台風時の動画で見たね、トタン板が一直線に飛んでいった。空を自由自在これは難しい。2羽のカラスがじゃれあってが～が～飛翔回転、急停止、またまたぐいと上に揚がってふわり浮いている、すごいね。

◎植物の種が綿をつけて飛んでいるが、あれは小さい種だもんね、風まかせだけど飛ぶよね、ビニール袋が風に舞うのとおなじだね。鳥にすりゃ、「トタン板や　ビニール袋と　一緒にされりゃ　怒るよ」鳥の羽が人間の腕から先と同じようにたくさんの骨やら筋肉があり、そこに羽がはえているらしい。

◎前肢、手の部分が翼、羽になる。鳥がまだ飛べないころ、翼をばたつかせて樹の上に登る。樹から樹へ、枝から枝へ。樹のてっぺんから滑空して地上へ。それから、もっと飛べるようになり、滞空時間が増し、回転、ブレーキなどのコントロールができる、そして今のようにすいすい飛べるようになった。

◎恐鳥：恐竜や翼竜が絶滅し、海の中、魚竜や首長竜が絶滅し、その後、鳥類と哺乳類での戦いが始まった。飛ばない鳥は巨大化した。巨鳥モア：高さ3.5M：は500年前までいた。ネットで写真を見ると、恐竜から鳥になり、先祖帰りして恐竜に戻った、といってもおかしくない。口はくちばしだが、これは恐竜だ。ただあまり永くは栄えなかったそうだ。500年前といえばまだまだ最近じゃないか、でっかい鳥が猛スピードで襲って来れば、たまったもんじゃないね、「餌じゃ　ねえぞ」なんて言っておられない。

◎鳥が最も頼りにする感覚器：目。鳥の目の話は何度も聞いた、人間の目よりずっと優れている器官だと聞いているが、「じゃ　どんな風に見えるのかな」という答えは教えてくれない、というより、現代の人間では、再現できない、わからないのだろうね。

◎猛禽類の目の解像度は人間の2～5倍だそうだ。夜行性のフクローは、暗闇でも見える。

◎色：人間はフルカラーで見れるが鮮明でない、三原色のフルカラーしかない。それに比べ鳥は、赤青緑に紫が加わり、その4つがきれいに並んでいる、その差はすごいらしい。もともと脊椎動物の目は鳥と同様、四原色タイプだった。哺乳類は恐竜に喰われないために夜間こそこそ暮らしていた。長い間の夜行性生活が続いたので、2色タイプになった。人間の祖先は、緑と赤の区別がつかないと果実が熟したかどうかの判別がつかず、食料確保の支障が出たため三原色のフルカラー視覚を復活して確保した。

◎生物が色鮮やかということは、仲間の目に、その色鮮やかさがはっきり見えるということだ。鳥、魚、両生類には色鮮やかな生物がたくさんいる。哺乳類の多くは、モノクロか茶色といったメラニン色素由来の肌色、毛色しかもたないのは、色を十分認識できず、色彩感覚に乏しい。人間がたまたま一つ増やしても、370～750ナノメートルの光しか見えない。この領域の光を可視光線という。鳥の可視域は320～750ナノメートル。

◎鳥は磁力も見る。地球の磁場を目と脳の部分で感じ取るようですが、そのメカニズムはまだ解明されていない。

109　比良　221221

◎夜の 11 時、これから車中泊で寝ます。9 時頃、晩飯と風呂をすませ出発した。滋賀県に入って道路の温度計は 7 度、「これなら　暖かい」「イン谷口は　湖西道路　どこで降りるのかな」2 回目の今日も迷ったがなんとかやってきた。イン谷口に近づくと、道路上に多少白いものがあるが普通に走れる、駐車場に入れると 10 センチぐらいの雪、土の上の雪、ずりずり進みづらいがなんとか止めた。ゴム長靴を履いて寝る用意、ちょっと飲む用意、気温は 0 度ぐらいかな。シラフとかけ布団持参、じっくり眠れた。

◎朝 7 時に目覚めると、10 台ぐらい車がいる。雪が降り、やっと晴れ、雪山を楽しもうと数寄者の方々だ。ほとんどの方が 7 時台に出発。オレはゆっくり飯を喰い、着替えていたら 8 時を過ぎてしまった。冬の山は 4 時ころには降りてこないと日が暮れてしまう。早朝に起きだし 7 時ころにここに来るのは寝坊なオレにはいやだ。これからも、ここへは、前の晩から来ようと決めた。決めたこともすぐ変わるけどね。

◎去年は雪山にはほとんど行けなかったので、いろいろなことを忘れている。靴を履いてしまってから、雨具のズボンをはかなくっちゃ・・、二度も靴の紐を締めるのはいやなので、登山靴の上からズボンをはいた、と簡単にいうけれどこの作業はたいへんである。次に雪が靴に入らないようにスパッツをつけた。手袋は冬用の二重の物。毛糸の帽子をかぶり、冬用ジャケットを着込み、ザックの中にはアイゼンとワカンを入れた。ピッケルは、「もう　歳だから　これを使おう」安藤君からいただいた上等のピッケルを持った。アルミ製のピッケルを使っていたが、こちらは鍛造の鉄に木製の柄、本格的な格好のいいクラシックなやつである。

◎がはは、また迷っている、目の前が青ガレなのにもう少し先かなと勘違い、「こんなところで　渡渉はないよ」なんて反対方向へ。「あれれ　おかしい」気づいたが照れ笑い、雪を被ると風景が一変する。

◎青ガレの上で一本。今日は体力がない、だめだね、雪山は普段より時間がかかる。駐車場から徐々に雪が増えてきた、トレース跡がついているから歩けるが、足を潜り込ませてのラッセルは、シンドイの一語だ。

◎天気予報では昼頃から晴れといっていたが、まだ 10 時、お陽さんが出てきた、晴れると途端に景色が変わり、まわりの緑、空の青が白い雪とあいまってキラキラ輝きだす。雲ひとつないと言って後ろを振り返ると琵琶湖の上に白い雲がちらほらだけ、登っていく先、金糞峠の V 字型のへこみはまっさおだ。エンヤコラ、シンドイ、コラショ・・。防寒ジャンパー、セーター、シャツ 2 枚、着込んでおります。

◎金糞峠にやってきた、今日はそのまま“ずぼ足”で歩けそうだ、天気はいいが峠は風通しがいい、ちと寒いので下に降りた。目的は武奈ヶ岳というより“コヤマノ岳”あたりの散策だ、あそこのブナがいい、大きいブナは無いがたらりんとした大地に若いブナの樹がたくさんある、それが見たい。せっかくスマホを持っているので見ればよかったと思うが、足の向くまま、気にいった方角に、右に迷い、左に行き止まり、やっとスマホを出して GPS の確認。「あ　また間違ってる　どおりで　足跡がない・・」何度も雪の中をずぼずぼ歩き回った。このあたりは天然のヒノキが大きく育っている、風に吹かれ、雪に埋まり、まっすぐには伸びていないが、曲がった幹がいい感じである。

◎陽が照ると木の上に積もっている雪が落ちてくる、ぽたぽた水滴になって落ちてくる、バサッドサッと音がする、人が来たのかと振り返るほどの音がする、今日は頭に落ちてくる直撃は免れた。

◎コヤマノ岳、「いいなあ　気持ちがいい　最高だ」雪の上に座るところもないので、雪をかき分けザックを置いて弁当を広げた。弁当は昨夜でかける前に作った、ベーコンと野菜を炒めて入れた、美味いねえ。

◎1:30 昔のスキー場の建物付近にやってきた、40 歳代にはまだ大きな建物があり、スキー客で賑わっている処、ザックを担いで横切った。ここはひとっこ一人いない、10 台ぐらいの車の人たち、武奈ヶ岳の往復が多いのかな。昼過ぎだというのにもう夕方の陽の傾き、このままいけば 4 時ころには車の所に帰れるだろう。

◎燃費の悪いオレも最近はあまり食べないね。非常食をたくさん持ってきているが腹が減ってこない、腹が減らない分、体力が落ちている、元気が出ない、これはいかん。

◎4 時に車の所に帰ってきた。「今日はバテタ　ええい　また来るぞ　ここはいい」録音しながら湯を沸かし、着替え、コーヒーを飲み、かりんとうを喰った。帰り着いたのは 7 時前、楽しい 24 時間でした。

110　虫　271221

◎森上信夫著＜オオカマキリと同伴出勤　昆虫カメラマン、虫に恋して東奔西走＞

◎著者はオレより 15 歳下の昆虫専門のカメラマンだそうだ。本の中では大学職員の正業と昆虫カメラマンだとおっしゃる。「何だ　二足のわらじか」と悪態つきつつ、彼の写真をネットで見た。面白い、発想がいい、おおいに惹かれるものがある。プロが撮る花の写真では、「これなら　オレでも・・」というものもあるが、昆虫や、鳥は、「きゃつらは　動くので　撮れない」魚は、「オレは　水の中が恐い・・」とあきらめている。

◎生き物専門のカメラマン、おっと驚くようないいセンスの写真、「これは　オレには　撮れん」とうならされる写真を数多く見た、「すごいねえ　感動だ」

◎鱗粉を捨て去る・オオスカシバ（大透かし羽）：著者がいう、「撮りたい虫」というのは、たとえカッコよくなくてもいい、生活史の中に、写真的な見せ場や、特別な物語を持つ虫である。僕にとって、オオスカシバやセミヤドリガ（蝉宿り蛾：幼虫が蝉の腹部に寄生し体液を接種するうす汚い蛾、短命の蝉の成虫に寄生しわずかの間に蛹になる。）など。

◎オオスカシバ（開張 7 センチ）：「日本にもハチドリが　いるのですか」という質問がしばしば動物園に舞い込むらしい。空中停止飛行をしながら口吻を伸ばし花の蜜を吸う姿はハチドリ（体長 10 センチ）のように見える。「ええ　ハチドリとは　あんなに小さいのかな」オオスカシバはおそらく蜂に擬態しているのだろう。鳥は蜂を食べようとして針で攻撃され以後蜂を避けるようになる。飛んでいる姿や動きが蜂への擬態効果を高めている。しかも蛾なのに鱗粉がない。オオスカシバは多くの蛾と同じように鱗粉を纏っているが、蛹から羽化して最初のフライトで離陸する瞬間に鱗粉をまき散らし落としてしまう。

◎オレが見るオオスカシバは、緑色したカッコいい。そういえばスタイルは大型の蜂に似ている。あのコロコロの青虫が蛹になり、羽化するとは初めて知った。蛹は地中にいるそうだ。「え　それじゃ　クチナシの木の下」それではいずれスコップで掘ってみよう。昆虫好きな人はすぐに掘りに行くだろうが、オレはそこまで・・。

◎「おお　あいつじゃないか　オオスカシバ君　難しい名前　見ためはきれいなやつ　オレンチの　クチナシ毎年　丸裸にするやつ」いつもこんな風にうなっている。親虫が舞っているのを何度か見たことがある、こんなカッコいい虫の子が緑色の青虫になって、葉を食い荒らす。青虫君まさに保護色の緑色、葉っぱと同じ色、じっくり目を凝らさないと見つけられない。ところが、コンクリートの上に黒い糞粒がコロコロ落ちているので、「またぞろ出てきたか」と目を凝らすのである。割りばしを持ち出し、一匹、二匹と遠くへ投げ捨てる。昔は殺虫剤スプレーで撃退していたが、「薬はよくない」と思い始め箸でつまんでいる。今年も述べ何十匹も退治したが、冬前には全く葉っぱが無くなった、「木が　枯れないかな」という有様だが新芽が出てきている。

◎著者を彷彿とさせる話：「大カマキリがカナヘビ（トカゲ）に食べられるシーンを撮ってくれ」という依頼が入った。自然の中でそんな一瞬の出会いを探すのは無理なので、カナヘビを飼い始めると、これがなかなかかわいい。（オレは動きの速いトカゲを捕まえるのも難しい）　昆虫の複眼と違って人間と同じ目、目が合うと心が通うような気がする。カナヘビに快適に過ごしてもらうように気をつけた。用意した水を飲み、生きた虫を食べ、卵まで産んでくれた。だんだん慣れてきてケースのふたを開けると僕を見上げるようになった。ぼちぼち撮影できるかなと、大カマキリを入れると一瞬で食べてしまった。次々与えると食べる速さが遅くなってきたので、その時を狙ってシャッターを切った、撮影成功だ。1 っか月以上も一緒に過ごしたので、とてもいいモデルになってくれたし、すっかり僕に慣れている。別れはつらいが近所の公園に放してやらなければ。公園に連れて行き木道の上にそっと置くが、すぐに逃げようともせず顔を上げ、振り返って僕を見る。小さな枯葉が落ちてきたのに飛びつき、僕の足元で食事をしようとしている。僕にすっかり心を許している。可愛い、涙が出た。「もう見上げないでくれ・・」ほどなく小さな姿が草の間に見えなくなった。